

本阿弥光悦 (1558?~1637)

安土桃山～江戸初期の芸術家（書道、茶道、香道、絵画、陶器、その他）。

*書は松花堂昭乗・近衛信尹と並び「寛永の三筆」と呼ばれた。

本阿弥家は刀剣の鑑定を家職とする大富豪。但し、光悦自身は分家で宗家ではない。

*京の三長者（角倉家・茶屋家・後藤家）に並ぶ家系である。

熱烈な日蓮宗の信者。

家康から鷹ヶ峯たかがみねに広大な土地を与えられ、一族縁者や職人らと移住した。

金閣寺の北に左大文字山があり、さらに北に行くと鷹ヶ峯という地域があります。小高い山に挟まれた窪地の高台のような場所で、光悦寺や源光庵、常照寺があることでも知られています。市街地に含まれるといいながら、さすがに町外れに在るなという感じがします。晩秋ともなれば紅葉も見事ですが、時雨が降り始めた一瞬もなかなかのものです。霧に煙ったその様子といえど一点の水墨画を見るような景色でありまして、実に抒情的。但し、寒い。

今から約500年前は人が住まない地域でした。古くは栗栖野くるすのと呼ばれた遊獵地の一部であり、後の中世では蓮台野れんだいのと呼ばれた葬送地の背後にある地域でした。要するに辺鄙な野原だった。その一方、京都と丹波地方を結ぶ街道筋にありまして、軍事上の重要拠点であった長坂口などは南北朝時代には関所が設けられてもおり、『太平記』にも名前がしばしば登場しています。

光悦村の誕生

光悦は当代随一の文化人・芸術家でありましたから、交友関係も上層の公家・武家・大商人・高僧、そして一流の文化人ばかりでした。特につきあいの深い人々は、安南貿易（南蛮貿易）で名を馳せた茶屋四郎次郎とか角倉素庵（『嵯峨本』を共同製作。河川開削で有名な角倉了以の子）、灰屋紹益（紺灰業。吉野太夫との交情は有名。）、俵屋宗達（絵師、扇屋。）、尾形光謙（京染め業。光琳と乾山の父。）など、実に錚々たるものです。また、茶屋・角倉・灰屋・俵屋とは縁戚関係を結んでもおりますから、ことに密度の濃い間柄と言えます。

光悦らが大挙して移住したのは大坂夏の陣（1615年）が終わって間も無い頃と思われる。上述のように、重要な街道筋でありながら監視する者も居ないといった辺地でしたから、当時は「辻斬り・追い剥ぎが出没するような危険極まりない場所」と考えられていたようです。これは実は、秀吉が築造した「御土居おどい」（洛中全域を囲んだ壁のような土塁）とも深い関係があるのです。長坂口は、この御土居の北西部の通用門に当たる地点であって、この長坂口より北側というのは御土居の外側であり、まさしく治安が保障されない地域（＝洛外）であったわけです。

さて、光悦が拝領した土地は東西360m・南北800mもあって、田畠山林も含むとはいえ相当に広いものです。そこに50軒以上の家屋敷が建ったと思われませんが、人々は「光悦村」と呼んだそうです。多くの職人（工匠）も一緒ですから、一夜にして芸術村が誕生した次第です。おそらく、200名近い人数が住んだと思われるので、監視の目は自然と生まれそうですね。

家康との関係の始まりは光悦の父・光二の代からです。家康がまだ竹千代と名乗り今川義元の人質であった頃に、義元の招きで駿河に赴いた光二が家康に会っています。光二は家康の小刀を研いだり、食事の相伴を務めたということですが、家康と本阿弥家の接点が生まれたわけです。以降、本阿弥家にとって商売上も芸術創作活動においても大きな後ろ盾を得たこととなります。

さて家康は、豊臣家を滅ぼし名実共に天下を取めた直後、鷹ヶ峯の土地を光悦に与えました。当然、何らかの理由があったと思われるのですが、その辺りの背景を追ってみましょう。

移住の理由

この移住については不明な点も少なくはないのですが、大きなポイントは下記2点です。

- 1) 光悦が自ら移住を希望して家康が土地を与えたのか？
- 2) そもそも、光悦が移住した理由とは何か？

率直なところ、なぜ一斉に移住をする必要があったのかと思いますね。芸術創作活動の面では京の町中よりも郊外の方が確かに環境も良いでしょう。しかし、商売面の利便性を考えますと、一族や縁者(茶屋四郎次郎や尾形宗柏も含む)にしても、洛中に住む方が理に叶うと思うのです。ところが、彼らは勿論、その使用人や召使いまでも移住しており、常識では測り難いですねえ。尚、光悦をはじめ移住した者全員が法華宗の信者でしたので、信仰の村が誕生したわけです。

本阿弥家側の史料である『本阿弥行状記』、および『本阿弥次郎左衛門家伝』という書物の中で、「光悦が洛中に飽きて、辺土に住みたいと希望している」とのことを、京都所司代の板倉勝重が家康に対して消息報告として伝えた、さらに、この希望に沿って家康が鷹ヶ峯の土地を与えた、と記されております。詳細を見ると、176石余の在所の支配権も付与されて土地を拝領したとなっています。つまり、小さいながらも領主のような立場で鷹ヶ峯の地を任されたのです。

なあんだ、本阿弥家側の史料にもちゃんと書かれてあるではないか、と思われるでしょうが、実はですね、そのまま鵜呑みにできないと思われるふしがあるのですよ。それが問題です。

◆◇◆ 鵜呑みにできない要素 ◆◇◆

- 1) 林羅山(1630年に鷹ヶ峯訪問)の『鷹峯記』や灰屋紹益の随筆『にぎはひ草』の中で、活力に満ちた光悦村の記述は無く、むしろ、光悦自身が隠遁者のように描かれている。
- 2) 光嗟(光悦の子)は早くから鷹ヶ峯を出て、洛中に居住したことが『本阿弥行状記』で判明する。光悦村から離れる一族がいたわけで、しかも光悦がまだ存命中である。
- 3) 鹿苑寺(金閣寺)との境界争いが生じ、光悦村側が借地料を払うことで決着するなど、弱い姿勢を示しており、本阿弥一族による光悦村の支配も絶対的なものとは思えない。
- 4) 途中から近隣農民の流入が始まっており、一族だけの村とは呼べなくなっていた。光悦が亡くなる頃、あるいは亡くなった後には居住権や耕作権を巡って訴訟が絶えなかった。

どうも光悦に覇気が無く、家康から拝領した土地にしては支配権が弱いという印象ですねえ。光悦という人は、そういう支配権には無頓着であったとも伝わりますが、他の一族や縁者たちも全く無関心だったのでしょうか。全員が信仰の世界のみで暮っていたのでしょうか。

もしや……

憶測は禁物ですが、移住そのものが光悦の希望ではなく、家康側が望んで指示（命令）したと考えれば、光悦村の状況などは符合する点も多い。いくつか挙げてみますと……

- 憶測 1) 家康は何らかの理由で光悦を所払い(追放)した。光悦の希望に沿ったのではない。
- 憶測 2) 家康は芸術優遇の姿勢は周囲に印象付けたいので、土地を与える形で装った。
- 憶測 3) 光悦の活動を束縛できれば良いので、一族が離れることは許可（黙認）した。
- 憶測 4) 同様に、鹿苑寺との境界争いや近隣農民の流入なども、敢えて介入しなかった。

最大の謎は、追放を必要とする理由とは何かということです。最も可能性が高いのは、家康が警戒する反幕府行動を光悦が行ったか、もしくは懸念があったということでしょう。実際に行動したのなら所払い程度では済まないから、おそらく強い懸念を家康が抱いたのかも知れません。

江戸幕府を開いたものの、家康が思想・行動について各種の統制令を出したのはこの頃です。キリスト禁教令（1612）、大坂冬の陣・夏の陣の後に武家諸法度・禁中並に公家諸法度（1615）、諸宗諸本山法度（同年）と相次いでいます。家康にとって京都は安心できないところがあって、朝廷および公家は何かと幕府に抵抗を示すことが多く、諸大名の中には呼応する者も出て来る。大商人も疑えば怪しく、特に文化人などは行動の自由度が高く、彼らを仲介する存在でもある。家康は、将軍在職中には江戸に居るよりも京都方面に居て警戒する期間が長かったほどです。

折りしも、利休七哲で有名な古田織部が、大坂夏の陣に際して豊臣方に内通したという疑いをかけられ、自刃するという出来事が起こりました。家康としては、織部に連なる人脈を徹底的に洗ったに違いなく、織部の弟子である光悦も疑わしき人物として浮上したと思われます。

家康としては懸念材料を払拭したかったが、光悦を処罰することで抵抗勢力に弾みをつけてもまずく、そんな愚策は避けた。そこで、移住希望を叶えるような装いを繕ったのではないか。また土地も与えれば支援したと評価され、万事好都合である。おそらく、移住した人の中には、密かに幕府から言い含められた者も居たと思いますよ。この措置は光悦を抑えるための偽装だ、時が来れば洛中に戻ってもいい、それまでは光悦を監視するようにとか……。

光悦村の終焉

延宝七年（1679）、つまり光悦が亡くなって42年後に、彼の孫の代になって公儀より沙汰が下りました。度重なる訴訟問題に決着が付けられたのですが、本阿弥家側の主張は認められず、流入農民が居座ったのみならず、**光悦以来の拝領地支配権の継続を否定**されてしまったのです。流入農民は実は尾形家の支配下にあり、さらに尾形家の後ろ盾には東福門院（後水尾天皇の中宮、2代将軍徳川秀忠の娘）が居たと噂されますが、**光悦村の土地は幕府に返上された**のです。

現在残っている光悦寺は、もともと光悦邸内にあった先祖供養の位牌堂を寺に変えたもので、今日では境内の庭にある、特徴のある竹垣【光悦垣】が有名です。

一族や縁者が鷹ヶ峯を後にした日には雨が降ったのでしょうか。季節はいつの頃でしょうか。もし時雨となったのなら、それは、既にこの世にはない光悦の涙雨であったかも知れません。